

# そして、星の輝く夜がくる

## 真山仁

あけましておめでとうございます。冬休みは楽しくすごせましたか？

いよいよ3学期。寒いので、体調に気をつけながらがんばりましょう

今年には2020年。阪神淡路大震災から丸25年が経ちます。昨年の12月、ルミナリエを見に行ってきました。「神戸ルミナリエ」は大震災の起こった1995年の12月に初めて開催されました。震災で亡くなった方への鎮魂と都市の復興・再生への夢と希望を託して始まったものです。それ以来ずっと続いているのは、きれいなイルミネーションだからというだけでなく、次の世代へ記憶をつないでいきたいという人々の気持ちの強さのおかげだろうなあ、と感じました。昔の神戸の街がどんなだったか、今の神戸になるまでの復興の道のりはどんなものだったのか、話を聞いても想像するのは難しいかもしれません。では、2011年の東日本大震災はどうでしょう。今回紹介するお話の主人公は小野寺徹平。阪神淡路大震災を経験した神戸の小学校教諭です。被災地で教師の数が足りなくなり、派遣の応援教師として東北の小学校に赴任。コテコテの関西人といった感じの彼ですが、子どもたちのために怒ったり泣いたり笑ったりできる熱い先生です。赴任してきた初日、担任する6年2組の生徒たちに「がんばるな！」と訴えます。作文に自己紹介と「もうやってられへんわ！」と腹の立つことを書いてもらい、クラスの生徒の気持ちを知ります。みんな、避難所で暮らしたり、家族を亡くしていたり...明るく振舞っていてもストレスを抱えていました。「やってらんねえ」を東北弁で言うと「わがね」。やってられないなあ、とか、もうダメだっていう時に使うそうです。その言葉を知り、みんなの作文を集めた「わがね新聞」を作る！という小野寺。世の中と大人たちにダメだしをする新聞。大人になってしまうと、本音でのやりとりは難しくなりますが、生徒の保護者とも正直な気持ちで交流し、被災地が抱えている様々な問題と向き合っていきます。6つのお話が収録されていて、震災を色々な視点から見られると思います。生活、原発、生死の分かれ目、ボランティア、追悼式、津波...。被災しただけでもショックなのに、他の問題が一気に自分に押し寄せてきたとき、私はちゃんとしていられるだろうか、と考え込んでしまいます。6年生は気丈に振舞っていますが、大人でも逃げ出したくなるようなしんどいことばかり。明確な結論を出していないので、読みながら一緒に悩めると思います。続編の「海は見えるか」もおすすめ。任期が1年伸びて、遠間小学校にいたことになった小野寺は、次年度の6年生を担当することになります。昨年度とは違った生徒たちとの距離感に悩みながら、1人1人に寄り添う7つのお話。表題作「海は見えるか」は松原海岸を復活させたい人たちのお話。なぜこのタイトルなのか、読むとわかります。普通の生活に戻りたい、と思う気持ち。何年経っても、完全な「復興」って難しいのかもしれない。

真山仁

1962年大阪府生まれ。同志社大学法学部政治学科卒業。読売新聞記者を経て、フリーランスとして独立。2004年、熾烈な企業買収の世界を赤裸々に描いた『ハゲタカ』でデビュー。2012年『コラブティオ』で第146回直木賞候補、『グリード』で第35回吉川英治文学新人賞。